兄に教えてもらったそろばんのうち、たいへんだったのは割り算のやり方でした。そのころ、そろばんで割り算をするには、特別の「割り算九九」を覚えなければなりませんでした。「二一天作の五、二進の一十……」という、たいへん覚えにくい九九です。これが、三の段、四の段と進み、七の段、八の段くらいになると、さらにむずかしくなって、なかなか覚えられません。伊策は、学校では何回も賞状をもらうほどすぐれた成績をあげましたが、その伊策でさえ、この「割り算九九」を覚えるのはたいへんでした。

学校から帰ってから、伊策は家の手伝いをしなければなりません。水くみやふろたき、それに畑の草とりや馬の手入れなど、子どもでもできる仕事はたくさんありました。そして、夕食後、いろりばたでの家族そろっての楽しい話しあい――それで一日が終わるのですが、そこで兄がそろばんを持ってくると、伊策の頭に「二一天作の五」がうかんで、泣きだしたくなりました。